

☆ 世界の子どもたち ☆

オーストラリアの幼児教育

永井康子

ワンダリング幼稚園

ワンダリングというところ

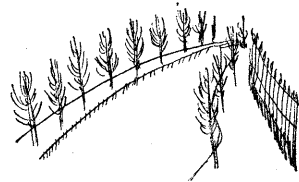
西オーストラリア州の州都パースから二〇km南東へ下ったところに、ワンダリングという町があります。ほんの小さな何でも屋があるだけの、町とは名ばかりのところですが、そこから更に草むらをぬって二〇km、ゴアナ（トカゲの一種）がノコノコ歩いているがたがた道を薄茶色の砂ぼこりを

もうもうとあげながら車を走らせると、小さな教会と学校、孤児たちが住むコテッジが見えてきます。これがワンダリング・ミッションです。

内陸地ワンダリングの夏は、中央の砂漠から強風が吹いてくるため非常に暑く（四〇度C位）、牧場があるので、ハエがうるし声をあげて押し寄せてきます。雨がしとしと降る冬は、四度にまで下がります。

一番近い町ビンジャリーまでは東に五〇km、西の方向にあるポディントンまでは五

五kmもあります。これらの町のお店は、品数が少い上にとても高値なので、私は毎週金曜日、保育が終わると同時に、パースへ買出しに行きました。ハイ・ウェイの左右は見渡す限り牧場で、昼間は、緑や赤の美しいオウムが車の音に驚いて舞い上り、羊たちもあわてて走りだします。夜は、カンガルーが目の前を横切って行きます。私の車にはカンガルー・バー（カンガルーよけ）がついていないので、緊張して運転しました。大きなカンガルーにとび込まれると、



車がへこんだりヘッドライトがこわれたりして、走行不能になってしまうことがあるからです。

ワンダリング幼稚園

ワンダリング・ミッションは、もともとカソリックの孤児院で、神父さんとシスターが孤児約六〇人の世話をしていたのですが、経営難から管理体制が代わり、孤児は、原住民（オーストラリア大陸に白人が移住をはじめる以前から住んでいた人々の総称）の子ども三〇人となりました。その時私が、この幼稚園の主任として、州教育庁から派遣されました。主任といっても、先生は私ひとり、隣りにある小学校も、校長先生ひとりです。

原住民の「孤児」は、実際に親がいないわけではなく、子どもが多すぎて親が面倒をみきれない（親には定収入がなく、政府の補助金では足りない）、お酒を飲んでばかりいて、子どもを育てる能力が親に全くない、片親が刑務所に入っている上に補助金は飲んでしまうので、子どもにまではま

わらない、等といった理由で孤児院に収容されているのです。ですから、てんかん・盗癖・言語障害等のある子どもたちで、皆、本当の真心のこもった愛に飢え渴いていました。

保 育

保育は朝九時から十二時までの三時間、月曜日から金曜日までの五日制です。先生の勤務時間は一日四時間半です。（八時四十五分から十二時半までの三時間四十五分と、四十五分間のブランニング・タイム）保育内容は自由で、各園の主任教諭に任されています。従って園によってまちまちなのですが、一応、簡単な時間割（表）を書いて貼り出しておくように定められています。保育目標については、毎月、本部に報告する義務があります。

天気の良い日には、よく子どもたちをピクニックに連れて行きました。草むらを歩いて美しいワイルド・フラワーを眺め、様々な木の実を集めます。また、子羊をだいたり羊の毛を刈る仕事を見たり等々、本物

に接する保育をすることができたのは、私自身にとってもうれしい経験でした。

遊 具

遊具は、ジャングル・ジム等本部から送られてきたものの他に、ゴミ捨て場で拾った古い家具やアイロン、トースター、オーブン、フライパン等があります。オーストラリアでは、おもちゃでなく本物を使うように奨励されているのです。

原住民の子どもの身近にあるものは、やはり町の子どもの（白人）のそれとはかなり異なります。例えば、動物はヘビ、カンガルー、ゴアナ等です。それで私は茶色い膚のお人形やヘビの親子等を、きれいな模様の残り切れで作りました。

パズルもよく保育に使われますが、市販のものには種類に限りがあり、原住民の子どもに合うものが少ないので、これも自分でいくつか作ることにしました。（原住民の子どもの絵を描いてジグソー・パズルを作ったのが認められて、後にパズルの本部から特別に依頼を受けて原住民向けの新しい

遊具を私が製作しました)

閉園

一九七六年に厚生省の方針が変更され、就学前の子どもは親のもとに置くべきであるという事になりました。子どもを育てる能力に欠けた親のもとに孤児院に居る子どもたちを送り返すことについて、多くの議論が交されました。しかし、園児数の急減、ミッシェンの経営難の深刻化に加え、ペースに新しく開園される原住民の幼稚園に私の転勤が決まった等の理由で、このワンダリング幼稚園は閉園となったのでした。

原住民と教育

原住民

原住民は現在、オーストラリアの大きな社会問題となっています。なぜなら彼らは白人のように働かないからです。彼らは、就職しても安定する性格ではないので、フラットどこかへ行ってしまいます。決まっ

た時間に出勤してくることも稀で、雨が降ったりすれば行くのを止めてしまいます。そしてついには仕事を失うことになります。悪循環なのです。

混血原住民は、年々増加しています。白人との混血によって彼らの膚の色は次第に白くなり、遂には原住民の血が混じっていることがわからなくなってしまう。 (劣性遺伝で黒い膚が出現することはないと証明されています。) 見かけは白人でも、原住民の性格を受け継いでいる人が多く、この混血原住民の数は、主要都市で急激に増え続けているのです。

原住民の幼稚園

前に述べたワンダリング幼稚園は原住民の子どものための Pre・Pre・School (二歳半から三歳まで) でしたが、同じ性格の園がいくつかペース郊外に開園し、私は、そのうちの三園を受け持つことになりました。イナルー幼稚園は週三日、ベルモントとベントリーの幼稚園は週一日ずつです。原住民の幼稚園では、それぞれの地区の

厚生省出張所及び保健所との連絡を密にしなければなりません。その上、各園ごとに原住民の実習生と助手が配置されているので、テレビのチャンネルをひねるように自分自身をパッパッと切りかえねばなりません。また、新しい試みの幼稚園であるために、訪問客も絶えません。三園掛持ちはほんとうにたいへんなことで、自分自身が広く薄くなって行く様な気がしました。(あまり忙しいので、後にイナルー週三日、ベルモント週二日に変更してもらいました。)

助手——原住民の感覚

三園とも、責任を持って働いてくれる助手を得るのにとっても苦労しました。日本と違って、私たちには交通費が支給されません。また公共の交通機関は東京ほど発達していないので、車を持っていなければ通勤はほとんど不可能です。そこで幼稚園の近所に住んでいる原住民の中から助手を捜しましたが、なかなかみつかりません。なしる無資格の人たちですから、俸給が失業手当よりも低く、働きたくないというのが

本音のようです。

どこでも、子どもたちを幼稚園まで送り迎える乗物が必要でした。幼稚園のすぐ近くに住んでいても、親に進んで子どもを送り出すという意欲がないので、一軒ずつ迎えに行かねばなりません。ベルモント園は厚生省のマイクロ・バスを借りて私たちは先生が交代で、イナルー園は厚生省のホーム・メーカー（婦人会の係員）たちが、ベントリー園は保健所の看護婦さんたちが、普通乗用車で園児の家まで送迎に行きました。

親子

親の協力を得るのが、また一仕事でした。欠損家庭の子どもが多く、親子の名字が違うのはめずらしくありません。親戚にあずけられている子どももかなりいました。

これらの子どもたちは、確かに放任されています。二cmもナイフで切った真新しい傷口を見せて「ママが切ったんだよ」と平気で言う四歳男児。母親が消毒もしないでアイリング用の穴を開けたために、耳をす

っかりはらせている三歳女児。足がおできだらけの三歳女児……彼らは口をそろえて「ママ、お医者に行くお金ないの」「お酒を買いお金はあっても、子どものために薬を買いお金はないというのです。何とタフな体験をしなければならぬ子どもたちなのでしょう。そんな彼らに楽しい経験の場を与えることが、原住民の幼稚園の目的のひとつなのです。

開園当初、鼻をたらし特有の臭いを発散させていた原住民の子どもたちも、後に保健所の看護婦さんから、心身共に優れていると、おほめの言葉をいただくまでになりましたが、ついに親（保護者）の協力を得ることはできませんでした。

幼児教育、成人教育

都市に住む原住民はほとんどが混血で、先祖の言葉はすっかり忘れてしまつて、彼ら特有の訛のある英語で話します。オーストラリア内陸から北部にかけての原住民特別区 (Reserve) に住む人々は、昔ながらの彼ら独自の言葉を使います。けれども子ども

もたちはオーストラリア文部省の方針で、幼稚園の時から二か国併用教育 (Bilingual Education: 原住民の言葉と英語の教育) を受けます。親の知らない新しい知識も子どもたちは学びます。ところが大人たちは学校教育を受けていないために子どもへの教育が大人の地位損失を招く結果となつてしまいました。

大人にも子どもと同様に読み書きを教える必要があります。(読み書きを教える先生のことを、リタラシー・ワーカー Literacy Worker と呼びます。) 大人も子どもも母国語を読み書きできるといふことは、彼らの社会の大人と子どもの関係を正しく維持すると共に、彼らの伝統・習慣の保持をも助けることとなります。

幼児教育が一番大切だと思つてきた私ですが、この原住民の社会では、成人教育 (Adult Education) も同様に大切であることを痛感し、ついに一九七七年十二月、西オーストラリア州立幼稚園の先生を辞職して、リタラシー・ワーカーとなる決心をしたのです。